Ⅳ－16　中山間地域活性化計画策定におけるワークショップ手法の活用事例
－馬路村魚梁瀬地区での活性化方策づくりワークショップ－

高知工科大学社会システム工学科　学生会員　○有元　和哉
高知工科大学社会システム工学科　　正会員　　大谷　英人

1、はじめに

高知県では、21 世紀に向けて中山間地域の活性化策を探るモデル事業（平成１１年度）として馬路村と東津野村を指定し、地域活性化計画づくりが進められた。馬路村は、営林署の統廃合問題 [1] で出揺れ動いている魚梁瀬地区が対象である。魚梁瀬地区では、これらの統廃合問題を含め、住民と行政 [2] とが一体となって魚梁瀬地区を活性化するためのワークショップ [3] に取り組んでいる。

魚梁瀬地区のワークショップは、下記の 4 回が実施された。本研究では、そのうちの第 2 回目の「地域方策づくりワークショップ」について、その内容と課題について考察する。

表１－過去４回のワークショップの日時と概要

回	日時	概要
1	1999 年 10 月 26 日	**「地域の課題発見ＫＪ法ワークショップ」** 魚梁瀬の素材(資源)について、再認識し、問題点と課題等についての検討した。
2	1999 年 11 月 25 日	**「地域方策づくりワークショップ」** 前回のワークショップの結果を参考に、商品化に初の発想練習を行い、思考方法を学んだ後、地域活性化のための方策づくりを行った。
3	2000 年 1 月 25 日	**「私のプロジェクト提案ワークショップ」** 前回のワークショップをふまえて、「私のプロジェクトの提案」を行い、具体案を絞り込んだ。
4	2000 年 3 月 1 日	**「プロジェクト実行可能性ワークショップ」** 絞り込まれたプロジェクト提案を、より現実のものへと近づけるべく、その問題点と課題、及び解決方法の検討を行った。

2、地域活性化方策づくりワークショップの概要

今回の地域活性化方策づくりワークショップは「商品開発ワークショップ」[4] を応用したものである。

地域活性化方策づくりワークショップは、個(性)と個(性)を結び新しいものを生み出す手法を学び、地域資源や可能性に目を向けてもらうと同時に柔軟な発想で、潜在している資源の掘り起こし最終テーマである地域活性化のアイデアへと結び付けていくのもである。

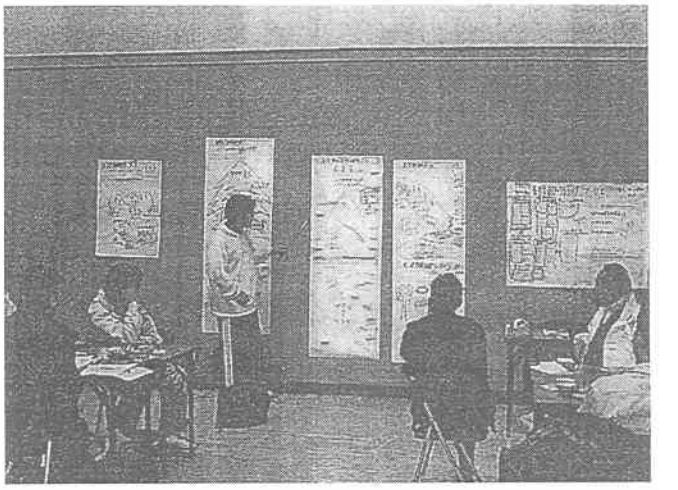

写真１－ワークショップ発表風景

3、各段階別の結果

１）第一段階「いろいろえんぴつゲーム」

まず、第一段階のワークショップは、商品開発ワークショップにならって身の回りの日常品などから二つのものを取り上げ、それを合体させて、新しい商品を作るというものである。

現在、市場に出回っているものの多くは合体商品である。ヒット商品の多くは、常に組み合わせからのアイデアである。最初の商品開発思考であったため、「小型テレビつきえんぴつ」や「小型携帯電話えんぴつ」など、商品となるには現実離れしたものが多かったが、商品を考えるには、いろいろな方面からの考え方が必要であることを理解してもらえたといえる。

２）第二段階「敬老の日の献立ゲーム」

第二段階では、思いついた食材をあげてもらい、その制限された食材を利用して敬老の日の献立を考えてるものである。

このテーマは、限られたものをいかに加工を施し、高齢者が喜ぶ食事をつくるかとがテーマである。魚梁瀬地区特有の食材であるイノシシ肉、シカ肉やゆずを

利用した料理などが出たが、考えてもらった献立のほとんどが、高齢者の好むものでなく、自分が作れるものや食べたいものなど、自己満足に走ってしまい、テーマからかけ離れたアイデアが目立った。そうした結果を基に、活性化方策を考えるときに地域での限られた資源と利用者、年齢層や趣味などを考え、特産品を開発し、市場へ送り出すかを注意事項とし、理解してもらった。

3) 第三段階「地域活性化方策づくりゲーム」

第一、第二段階で訓練した思考をふまえて、地域の活性化方策づくりを行った。方法は、魚梁瀬地区の資源、技術や人材などを挙げ、それら、出てきたものを加工したり、合体させることにより、活性化方策を考えてもらうものである。

考えられた結果としては、かなり具体的なものが考えられ、よい結果が出たといえる。

図1－各提案内容の振り分け分布図

組み合わせたもの	活性化方策
狩猟の達人・自然・山村留学制度	「新追山体験学習」
千本山・カモシカウオッチング・オートキャンプ場	「ドキ！体感」
ヤナセ杉・木工品・ＰＲ	「製品　ＹＡＮＡＳＥ」
団結力・山に関する知識・山仕事の技	「魚梁瀬の暮らし・体験ツア」
温泉・川魚料理・魚梁瀬ダム	「安らぎの里　魚梁瀬」
千本山・天然ブナ林・カモシカウオッチング	「魚梁瀬観光めぐり」
ヤナセ杉・工芸品・山菜とマツタケ	「魚梁瀬を楽しもう」

第１回ワークショップで行ったテーマ「良いものを守る」、「あるものを利用し尽くす」、「必要なものをつくる」、「嫌いなものを取り除く」のうちで、「あるものを利用し尽くす」、「必要なものをつくる」といったものから大きな発想の転換が感じ取られた。第１回ワークショップでは、病院、道路・橋、夜道、呑み屋、若者・人、学校・教育、遊び場、ダム湖の利用、温泉、自然、イベント、コンビニ、産業、などといった、現存するものや個別的なものが多かったが、今回の活性化方策づくりワークショップでは、「新追山体験学習」、「ドキ！体感(カモシカウォッチング等)」、「魚梁瀬の暮らし・体験ツアー」など、地区全体を考えたもので、かつ、具体的で利用者を明確にしたものとなった。

4、ワークショップの課題

今回の活性化方策づくりワークショップは、ワークショップ参加者の興味を引くことができ、ユニークな発想・アイデアが出され、地域の新しい面の方策が提案された。しかし、参加者はさほど多くなく、これらの意見を住民の意見として扱うには、まだ問題がありそうである。また、短時間・集中的なワークショップのために、まだまだ意見をだしきれていないなどの問題もあり、今後、さらに数回に分けてワークショップを行っていく必要がある。

---

1) 馬路村はかつて、村内に２つの営林署が存在していたほどの全国でも有数の国有林地帯で、資源に魚梁瀬天然スギを持ち、優良黒字営林署であった。営林署の置かれている魚梁瀬地区では人口の３分の１が営林署職員を占めていたが、1998年７月、林野庁は経営の悪化した国有林野事業の抜本的改革の一環として、全国９営林局を７森林管理署へ、228営林署を98森林管理署へ統廃合すると発表した。高知県内においても９営林署が各流域ごとに４森林管理署に再編され、その中には馬路村にある魚梁瀬営林署の安芸森林管理局への統廃合が盛り込まれており、魚梁瀬地区では営林署の廃止により、地区の存続問題にまで発展している。

2) 行政参加者は、高知県森林政策課、安芸林業事務所並びに安芸農業改良普及センターと馬路村で連携して実施している。

3) ワークショップとは、「総合学習とグループ創造性に力点を置いた共同作業」のことで、もともとは演劇や音楽などの世界で、グループによる集団創造を促す目的でおこなわれたものである。「まちづくりワークショップ」とは「まちづくり」をテーマに実施するワークショップである。まちづくりの分野にワークショップが導入されたのは、米国の環境デザイナー(ローレンス・ハルプリンやズム・バーンズ)らの実験的試みが最初(60年代後半)といわれている。その後、さまざまな専門家により、それぞれの関心や目的に応じたワークショップ手法が開発された。これらは70年代に日本に紹介されたが、今のように広く注目されるようになったのは、ここ５年くらいのことである。

4) 商品開発ワークショップは、(財)熊本開発研究センターの前田芳男(主任研究員)が開発したものである。商品開発ワークショップとは、商品(特産品)を開発するために組まれたワークショップであり、これは、２つの商品開発発想練習段階と最終段階の商品開発段階の３つの段階に分けられ実施される。第一段階は、「いろいろ鉛筆ゲーム」として合体商品開発を行い、優秀なヒット商品開発の難しさを学ぶ。第二段階では、「晩ご飯の献立ゲーム」により限られた資源の中からの利用者を考え商品の開発を学ぶ。最終段階では、２つの段階を基本とし、その地域などが保有する資源や技術を結び付けた商品開発を行うものである。